

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

https://zuioji.jp

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【三十三】

後堂 門原 信典

第十九則「俱胝一指頭」 寐語⑭
〔莫妄想四〕

【評唱】「果是次日、天龍和尚到庵。胝乃迎礼、具陳前事。天龍只豎一指而示之。俱胝忽然大悟。是他當時鄭重專注。所以桶底易脫。後來凡有所問、只豎一指」

「果たして是の次の日、天龍和尚庵に到る。胝乃ち迎え礼して、具に前事を陳ぶ。天龍只だ一指を豎て之れに示す。俱胝忽然として大悟す」

「山神」が俱胝和尚の夢枕に立った明くる日、天龍和尚が庵を訪ねてきます。

實際尼は俱胝和尚の庵を去り、天龍和尚の処に行き「天龍和尚よ。いよいよ貴方の師である大梅法常禪師の法を伝える時が来ました。俱胝和尚は私に法常禪師の辨道を思い出させてくれました」

だからこそ貴方が赴いて法を伝えて下さい」と告げます。

天龍和尚の法系は「菩提達磨・太祖慧可・鑑智僧瑠・大醫道信・大滿弘忍・大鑑慧能・南嶽懷讓・馬祖道一・大梅法常・天龍和尚」と続きます。そして實際尼は馬祖様の弟子です。仏法の系譜からは、一般的な血縁関係に例えると天龍和尚は實際尼の甥に当たります。

一方、俱胝和尚は「山神は『ここを去るな、肉身の菩薩が現れる』と云うが、あの尼僧さんにも一度度会って私の修行を問うてみたものだ。肉身の菩薩とはひよつとしたらあの尼僧さんかも知れない」と心の底で待っていました。そこへ天龍和尚が現れます。

俱胝和尚は一目見て「この人はあの尼僧さんと同じ修行をされた方に違いない。肉身の菩薩様だ」と

確信し、恭しく礼拝し實際尼との出来事を告げ「私の修行とはいったい何だったのでしょうか」と問いかけます。すると天龍和尚は黙って指を一本豎てました。

おそらくこれは人差し指だと思いますが、俱胝和尚は忽然として悟りを開かれました。忽然は「たちまちに」「はたと」と云う意味です。

「是れ他當時鄭重に專注す。所以に桶底脱し易し」それは他(俱胝和尚)が實際尼の問いかけに一心に取り組んでいたから桶の底が抜け落ちたように、たちどころに脱落したのです。自分の辨道に対する疑念が風船のようパンパンに膨らみ、それが天龍和尚の一本の指によってパチンとはじけた瞬間でした。

天龍和尚の師である法常禪師は馬祖道一禪師に「如何なるか是れ佛」と問い、馬祖様の「即心是佛」の一言で大悟され大梅山に入って草庵を結び、誰に会うことも知られることも無く、ただ一人坐禪辦道する事三〇余年。

この深山幽谷の独居は、消極的な世捨て人の姿ではなく、名利に關わらない出家者として「即心是佛」を受け継ぐ事でした。やがて同じ馬祖門下の塩官齋安国師の弟子の一人が天台山で道に迷い、偶然に法常禪師の許にたど

り着き、この僧の報告によってその存在が知られますが、世の中にいなかった為、多くの坐禪人にその足跡を慕われることになりました。その姿が天龍和尚を育て、そして俱胝和尚を導き「即心是佛」の法が「一指頭」で伝わるのです。

私達の育った時代は高度成長期の真つただ中。幼い頃にはテレビも洗濯機も冷蔵庫も無かったのですが、それが当たり前だったのでも不自由とか不便だと思つた記憶はありません。しかし、目まぐるしく世の中は変遷していき、社会は技術力と生産性と利便性の向上にのみ目が行き、人間の欲望をあからさまに刺激し、溢れかえる情報と物質に囲まれ、自然災害、紛争、コロナ禍等、一個人の想像をはるかに超えた環境に振り回されて生きています。しかし、この我々の目の前に現れてくる一切の出来事は真の事実です。

道元禪師の傘松道詠に「峰の色谷の響きも皆ながら我が釈迦牟尼の声と姿」とありますが、全てを「即心」(我が釈迦牟尼の心)といただき、それを縁として菩提心を発し、「是佛」つまり全てを佛道修行として調べていかなければなりません。この「心」は単純な「ココロの働き」ではありません。私の親戚に腎臓透析をされている

叔母がいます。御主人のお母さんが寝たきりになられた際にも、透析に通いながらご自宅で介護されてきました。そのお母さんが亡くなられた時に「私はお母さんに救われた」と話されました。どういうことでしょうか? 「お母さんは寝たきりになってから愚痴も我儘も一言も言わなかった。あそこが辛い、ここがしんどい」という事も、ホントに言わなかった。それでどんなに私が救われたか」と言つて涙を流されました。「愚痴を言わない」その事だけでも大変な修行です。

懺悔文も只の反省ではなく「煩惱即菩提」自分も他人も救われるのです。貪・瞋・癡が縁となつてみ佛様の恵みに気付き、「貪らない」「腹を立てない」「愚痴を言わない」。これが「即心」さらにそこから「分かち合い」と「優しさ」と「感謝」に育てていく事が「是佛」です。み佛様の願いです。み佛様の心に包まれて、今ここで佛道修行を勤める事が「即心是佛」の実践、坐禪です。

俱胝和尚は天龍和尚の一本の指でそれを悟つたのです。「後來凡そ所問有れば、只だ一指を豎つ」その後俱胝和尚は誰が何を尋ねてきても指を一本豎てただけでした。(続く)

禅師の場外乱闘を封じる小僧さんの機転

孤峰智璨禅師の「空碗問答」と「台山婆子」の驚直去

東京巣鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師 医学博士
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

高岩寺 来馬明規

【はじめに】

七、八月の禅問答のご紹介に引き続き、今月も大本山總持寺独住十八世・孤峰智璨禅師（こほうちさんぜんじ・1879年明治12～1967年昭和42）の機縁をご紹介します。筆者が約二十年前の雲水修行中に聞き書きしておいた話です。(1)

それはまるで老婆が生真面目な修行僧をからかう『從容録』の「台山婆子」が、現代に蘇ったかのような、痛快なやりとりです。

【空の飯茶碗の禅問答】

戦後の復興が進む昭和の時代、孤峰智璨禅師が神奈川県の大雄山最乗寺独住第十二世であられた時の逸話です（昭和二十三年）。ある時禅師は、東北地方の米どころの地にある寺に、法要の導師として招かれ、日中にくつもの法要をお勤めになられました。十分な昼食もとれないほどの綿密な行持も無事終了し、客殿に通され、法要に参加した寺院住職や関係者らと美味しい夕食を楽しく召し上がっていらつしやいました。

さて、その晩に提供された白米のご飯

がことのほか美味しく、禅師は一膳二膳と食がすすみ、ついつい三膳目のおかわりまで欲しくなっていました。

禅師の傍らには小学校高学年ほどの可愛らしい小僧さんが、給仕係として控えていました。ところが不思議なことに、小僧さんは膝の上に「ご飯のお櫃を載せているにもかかわらず、一向におかわりを勧める気配がありません。

しかし「自分からおかわりを求めない」のが、釈尊の時代から連綿と守られてきた出家者の決まり事（戒律・清規）です。自ら求めることは執着や貪りになるからです。

そこで禅師は一計を案じました。禅師は空になった「飯茶碗を持ち上げ、底が小僧さんに見えるように傾けて、「このご飯茶碗は大変良い焼き物だな」と茶碗を褒め、暗に「おかわりをください」と伝えたのでした。「おかわり」を口にできない立場を千も万も承知のうえで、態度では「ルール無用」ともいえる無茶な要求をしてきたのです。（イラスト）

ところが小僧さんはすかさず応じました。「禅師さま、そんなに良い焼き物

でしょうか。実はこのお櫃も、お茶碗と一緒に求めたものです。どうぞご覧ください」と言つて、空になったお櫃のフタを外し、中を禅師に見せたのです。残念ながらもうご飯はなかったのです。（イラスト）

【解説 禅師を完封する小僧さん】

禅師は一挙手一投足が修行であり、日常会話は禅問答で喫食は法要です。料理に余分があればおかわりは「再進」と言い換えて提供されますが、いたたく側からは決して要求できません。禅師は自らの行為が「戒律に反する」ことを承知のうえで食欲を丸出しにし、小僧さんに真剣な禅問答を挑んだのです。



おかわり NG の「戒律のリング」から出て 食欲の椅子を振り回し 新人に場外乱闘を仕掛けるチャンピオン



「良いお茶碗だな」（おいしい！おかわりを頼む！）
「このお櫃も一緒に求めたものです」（ご飯はもうありません！）

敢えて世俗の「プロレスリング」に例えれば、チャンピオンがおかわりの要求ができないリングのルール「戒律」から逸脱して、新人の研修生に場外乱闘を仕掛けるような、無茶な振る舞いでしょう。さて、小僧さんはおかわりを差し出せば、禅師の「破戒行為」に加担してしまいます。だからといって、おかわりをあからさまに断れば、和合を壊し「対立」を生みだすでしょう。たとえ初心の小僧さんであっても、いずれの対応も禅僧としては不適切です。つまり、禅師は小僧さんを袋小路に追い込んで、逃げ道のない巧妙なワナを仕掛けたのです。

残念ながら、この小僧さんの消息はわかりませんが、禅師のちに大本山總持寺貫首に就任。多数の祖師伝、史録を著され、鶴見女子大学（現在の鶴見大学）を創立するなど、曹洞禅の普及教化に大きな足跡を残されました。

【小僧さんに自分を見る禅師】

読者のみなさんは、以上のやりとりを孤峰智璨禅師が茶目つ気をだして小僧さんをはからなかった笑い話、と思われることでしょう。

しかし、禅師の自叙伝を紐解くと、まったく違った想いが筆者の胸に湧き上がりました。

禅師が僧侶を目指したきっかけは幼少時のつらい体験でした。(2) 禅師は明治十二年に富山県に生まれますが、誕生の翌月に父が逝去し、家族が離散。出家して尼僧になった母の姉に大事に育てられるが、七歳の時分に姪が可愛い盛りの四歳で急死し、ひどいショックを受けました。その葬儀で無常を目の当たりにし、出家を決意されたそうです。

そして十歳で孤峰白巖老師(1845～1909)を師匠として出家得度。白巖老師は幼い智璨禅師を心の底から可愛がり、夜は自分の床で「抱き寝」して世話をしたそうです。(イラスト)

ところが師匠の住職地、石川県の名利永光寺に移ると、兄弟子たちから陰湿ないじめや虐待を受けるようになりしました。そのあまりの辛さに、何度も還俗を考えたそうです。ある時には米搗ぎの杵を頭に打ち下ろされて重症を負い、医師の治療でかろうじて命をとりとめた、と述懐されています。筆者の想像にすぎませんが、禅師は給仕係の小僧さんの健気な姿に、



孤峰智璨禅師は生後すぐに父と死別11歳で得度し 師匠に育てられた

ご自身の辛かった少年時代を重ね合わせ、万感の想いのなかで「自分で自分に問答を仕掛けた」とも見て取れます。

【「驚直去」『従容録』より】

禅師が小僧さんに掛けた言葉「驚直」は禅籍『従容録』(3)に「驚直去」で示される、重要な語句のひとつです。

驚直 まっしぐらに突進する
直 まっすぐに
去 進む(現代日本語と異なる)

禅の世界では単に「まっすぐ進め」という意味だけではなく、「迷わず、まっすぐにそのまま進め、思考や理屈に囚われず、今この瞬間を生きよ」というほどの意味もあるようです。『従容録』に登場する老婆の言葉の真意も、「驚直」が持つ多重の意味がカギになっています。なお、次の段の原文の引用が難しく感じられましたが、一段飛ばして【まとめ】にお進みください。

【読み下し文】

- ① 台山路上一に婆有り
 - ② 凡そ僧有り台山の路什麼の処に向かつて去ると問えば
 - ③ 婆云く「驚直去」
 - ④ 僧わずかに行く
 - ⑤ 婆云く「好箇の阿師又恁麼にし去る」(後略)
- 『従容録』第十則 台山婆子本則

【現代語訳】

- ① 文殊菩薩が住むという聖地「五台山(台山)」へ行く道の途中に老婆が営む茶屋があった。茶屋の先で道が幾つに分かれており、どの道が台山に行くか明示されていなかった。
- ② 修行僧が老婆に台山への道を尋ねると、老婆は「真っ直ぐに進みなさい」と答えた。
- ③ 修行僧が言われたとおりに、真っ直ぐに歩き始めると、
- ④ 背後から老婆がからかうように言った。「あらあら立派なお坊さんなのに、また真っ直ぐ行ってしまったわね。」

【解説 老婆はさとりを促す菩薩】

茶屋の老婆は禅の心得がある「クセ者」。文殊菩薩参拝で台山へ行く修行僧たちに、親切に道案内する振りをしながら、「驚直」に様々な意味を含ませて問答を仕掛け、仏道修行の進達度を探り、時に笑っていたようです。老婆自身が「驚直」という言葉に執着しているようにも見えますが、修行僧の

迷いを鏡のように照らし出し、さとりに導く逆説的な菩薩にも見えます。以下の見立ては全く個人的な感想です。

上述の「空碗問答」で、禅師は台山の老婆のように驚直に進む道としておかわりを要求しました。寺の中を探し回り、どこかでご飯一杯を見つけて禅師にふるまえば、「世俗の正解」として一件落着いていたかもしれない。しかし、素晴らしいことに、小僧さんはこれが本来の驚直の道ではないことを見破り、自分の力で真の驚直を見いだし、禅師の前で実践してみせました。

小僧さんが言葉も戒律も対立も超越し、鋭い切り返しを伝えた瞬間、日本のお寺の客殿が、中国の五台山の茶屋になっていたように感じられます。筆者には老婆ならぬ「禅師菩薩」が絶妙の機縁を通して「小僧菩薩」を生み出したように、見えるのです。

【まとめ】

給仕係の小僧さんは孤峰智璨禅師が出家得度した年頃でした。禅師の目には、幼い頃の自分自身に映ったのではないのでしょうか。そして、台山の老婆に変身した孤峰智璨禅師の「無茶振り」が小僧さんの見事な対応を引き出したように思えるのです。遠い昔の老婆、幼き日の禅師、師家となった禅師、そして給仕係の小僧さんが、時間と空間を超えて邂逅し、合体したように感じ取れます。最後にもう一度、頭の中を解きほぐして笑いましょ。

ところで、なぜお櫃にご飯がなかったのでしょうか？ それは「喰うから空」だからでしょう。

【附記】

○本話は、大雄山最乗寺先住 石附周行山主老師(現大本山總持寺貫首)の法話を、平成18年に安居した筆者が書きとめていたもので、石附周行禅師の著書にも記載されています。(1) 孤峰智璨禅師が、親父が深かった群馬県雙林寺石附賢道老師(後の大雄山最乗寺独住第十四世)に「空碗問答」を話していた時に、同席して聴いていたのが若かりし頃の石附周行禅師(賢道老師の弟子)と聞いています。

○宗侶で俳人の岡山県長川寺 吉川彰準老師は、瑞應寺で修行されたのち大本山總持寺に上山し、孤峰智璨禅師(当時は監院)に仕えました。そして禅師の講義・提唱に深く感銘を受け、良寛様や大本山永平寺第五十世玄透禅師の研究に励むようになったそうです。(4)

- (1) 『禅味法悦』石附周行 大雄ブックス 平成22年 P. 221・225
- (2) 『人間を救う禅』孤峰智璨 昭和39年 教育新潮社 P. 122・139
- (3) 『従容録』全 高崎直承校注 鴻盟社 平成15年 P. 20
- (4) 『孤峰智璨禅師傳』岩本勝俊 発行 松浦英文編集 昭和48年 P. 110・111

「璨」(さん)きらきらと輝く美しい玉の意。王へんにト、夕、ヌ、米と書く。「璨々」は輝くさま。



◆ 頂きもの

今年も毎日過酷な暑さが続いています。その中で何か楽しみを、と言えば今の時期に食べられるものを楽しむことです。私のお寺に畑はないのですが、今年はオクラを育てています。夏野菜はトマトや胡瓜や茄子等、一株で何度

も収穫できるものが多いです。私はある年の大衆時代、直歳寮を夏で迎えました。その年の

初めて収穫した胡瓜を堂頭老師様に食べていただきたく、お持ちした時堂頭老師様は、

「まず韋駄天様にお供えしてからその後頂こう」とおっしゃいました。お盆の時期はお中元の頂きものがあつたりします。子供の頃、頂き物が好きなものであつたりすると「すぐ食べたい」という気持ちになつてしまつた事はないでしょうか。しかし何事も、自分だけの物ではない。

昔は頂いたものをお仏壇や神棚にお供えしてから、お下がりをお願いしていたのではないのでしょうか。核家族が進んで久しく、お仏壇が無い家が増え、

その様な文化が失われつつあります。頂きものを「有り難い、では早速いただく」となる。そうではない。ましてや我ですら我のものではない。

仏教ではそれを「無我」と言います。財や子供のことで悩む人は多いです。しかしすべては縁起により一時的に集まつていくものであり、それらにしがみつけば苦しみが生じるのです。

この無我とは、「執着こそが苦の根源である」と改めて気づかせてくれる深い内省の言葉です。命も体も、心もすべて借りものであり、財も子供もまた一時的な縁によつて結ばれただけの存在。だからこそ、執着するのではなく感謝して共にあり、手放す覚悟を持つ。

その一つとして、頂いたものがあるときは一度お供えしてからにしてはどうでしょうか。

瑞應寺専門僧堂侍真 足立 光顕
令和七年八月一日〜十日



■ 住友展覧

八月六日(水)、当山西側へ安置されている別子銅山殉職者、流亡者慰霊碑等で盆供養が厳修された。



■ 夏安居解制

五月に入制以来、三ヶ月。首座を中心に、辯道精進を続けた夏安居は、楞嚴会満散・土地堂念誦、小参・人事行礼等の諸行持を勤め、無事解制となった。



八月の日鑑

一日	祝禱
二日	日曜参禅会
三日	住友展覧
四日	楞嚴会満散・土地堂念誦
五日	小参・人事行礼
六日	日曜参禅会
七日	淡交会供茶会
八日	祝禱・略布施
九日	水施食
十日	日曜参禅会
十一日	観音講(仏教勉強会)
十二日	学校茶道
十三日	日曜参禅会
十四日	愛知学院大学参禅
十五日	略布施

九月の予定

一日	祝禱
二日	住友金属鉱山新人役員研修
三日	日曜参禅会
四日	参玄会(十一日迄)
五日	日曜参禅会
六日	祝禱・略布施
七日	観音講(仏教勉強会)
八日	日曜参禅会
九日	開山忌速夜
十日	開山忌速夜
十一日	寶篋印塔供養
十二日	日曜参禅会
十三日	両祖忌速夜
十四日	両祖忌速夜
十五日	略布施
十六日	宮城県三教区青年会参



令和の米不足に続き、天候不順による水不足。漸く恵みの雨かと思いきや、線状降水帯による水害の報。九月に入り、次第に秋の田には黄金に輝く福田の景色が広がります。食の大切さが話題になる一方で、コンビニスーパでは余った弁当などが賞味期限を過ぎれば廃棄されるとの事。

一つには功の多少を計り彼の来処を量る
二つには己が徳行の全欠を付つて供に応ず
三つには心を防ぎ過を離るることとは貪等を宗とす
四つには正に良業を事とするは形枯を療ぜんが為なり
五つには成道の為の故に 今此の食を受く

僧堂裡にあつての朝昼食時五観の偈、世の中が改めて食との向かい合い方を考える好時節と受け取るべきか。杓底の一残水を疎かにしては天地同根万物一体の理から外れてしまいます。「仏道は必ず行に依て証入すべき事」の通り、真に尊きは只管に行ずる毎日です。

(道)